

<h1>指導資料</h1>	<h2>国語 第136号</h2>	
	対象校種	幼稚園 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校
 鹿児島県総合教育センター 平成28年4月発行		

### 高等学校国語科における、「話すこと・聞くこと」の指導の工夫

高等学校国語科においては、指導が「読むこと」の領域に偏りがちであり、育成すべき言語能力の一つである「話すこと・聞くこと」の領域について指導の充実が求められている。そこで、当該能力の育成を目指した指導の工夫について、実践例を基に紹介する。

#### 1 高等学校国語科の目標から

平成27年度に全面実施となった現行の高等学校学習指導要領国語科の目標は次のように示されている。

国語を適切に表現し、的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

高等学校国語科の学習において求められているのは、いわゆる「知識基盤社会」と言われる21世紀において、社会の変化に主体的に対応するための基盤となる、国語による表現と理解の能力と、それを基にした伝え合う力を身に付けることである。この教科目標を全面的に受け、3領域1事項の総合的な言語能力の育成を目指す科目として、共通必修科目である「国語総合」が置かれている。

「国語総合」を基に構成される選択科目の中で、総合的な言語能力の育成を目的と

した唯一の科目が「現代文B」であり、その目標は次のとおりである。

近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。

また、高等学校学習指導要領解説国語編では、「現代文B」について、近代以降の論理的文章や文学的文章、現代の社会生活に必要な実用的な文章等を用いて、文章などを読んで考え、評価、批評し、自分の考えを効果的に表現する指導を、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の言語活動を通して行うことを重視する科目であると述べられている。

そこで、自分の考えをまとめて相手に分かりやすく伝える能力の育成を目指して高等学校第3学年で行われた実践例を基に、「現代文B」における、「話すこと・聞くこと」の指導の具体的な工夫について紹介する。

## 2 「現代文B」の実践例

本単元は、進学・就職を目指す生徒たちに必要な「話す・聞く」能力の育成を目指して、第3学年の11月に実施したものである。

- (1) **単元名** 「自分の考えを効果的に表現しよう～『心の底から届けたい』を届けよう・受け取ろう～」  
 キーワード：伝えたいことを口頭で発表
- (2) **単元の目標**  
 ア 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現しようとする。(関心・意欲・態度)  
 イ 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現する。(話す・聞く能力) (内容(1)指導事項のエ)  
 ウ 文体や修辞などの表現上の特色を捉え、自分の表現や推敲に役立てる。(知識・理解) (内容(1)指導事項のオ)
- (3) **取り上げる教材と言語活動**  
 教材：「行動としての話し言葉」竹内敏晴 (『探求現代文B』桐原書店)  
 言語活動：文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表する。(内容(2)言語活動例のエ)

(4) **単元の評価規準**

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	知識・理解
○ 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現しようとしている。	① 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成している。 ② 自分の考えを効果的に表現している。	○ 表現上の特色を捉え、自分の表現に役立てている。

(5) **指導と評価の計画**

次	単元の評価規準と評価方法 (□内は「判断基準」)	主な学習活動
一	【評価規準】(知識・理解) 【評価方法】「記述の分析」	○ <b>文章を読んで、要旨を読み取る</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>文章を読み、文章の大体の内容を捉える。</li> <li>これまで受けてきた「話し言葉の訓練」について振り返る。</li> </ul>
二	【評価規準】(話す・聞く能力①) 【評価方法】「記述の分析」(資料) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                     「判断基準」B                      (評価規準「話す・聞く」                      ①、②から設定)                 </div> ア 目的や課題に応じて情報を収集、分析、整理し、自分が伝えたいテーマを選択している。 イ テーマを選択した理由が伝わるよう、場に即した表現を用いて論拠を明示している。 ウ 自分の考えがよく伝わるように、場にふさわしい具体例を考え、経験等に即した内容にまとめている。 ※「判断基準」については、p.3参照	○ <b>話し方・聞き方に関する情報を収集すると同時に、伝えたい内容についての情報収集・資料作成をする</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>3～4人グループを作り、伝えたい内容について話し合う。</li> <li>グループ内で、話し方・聞き方に関する情報を収集するチームと伝えたい内容についての情報を収集するチームに役割分担し、相互に確認し合いながら資料を作成する。それぞれのチームで作ったものをグループ内で共有する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                     例 「今回、私が皆さんにお伝えしたいのは○○○です。それは、私にとって○○○○なものだからです。例えば、それによって私は、○○○○○という経験をしました。」                 </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>発表内容に以下の3点を盛り込む。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                             ア 今回伝えたいこと                              イ なぜ伝えたいか                              ウ 具体的な経験                         </div> </li> <li>発表する時間の前に、各グループで発表の練習をする。</li> <li>作成した資料は毎時間提出する。</li> </ul>
三	【評価規準】(話す・聞く能力②) 【評価方法】 「行動の分析」(発表) 「記述の分析」(ワークシート)	○ <b>作成した資料を基に、自分の考えを効果的に表現する</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>各グループとも発表時は発表者1人とするが、発表者以外の者も前に出て、他グループの聞き方の工夫を観察する。</li> <li>各グループとも他グループの発表を聞く際は、発表内容(盛り込むべき3点が含まれているか)を聞くチームと話し方の工夫を観察するチームに分かれ、毎回役割を変更していく。</li> <li>一つのグループの発表が終わる度に、個人で発表内容あるいは話し方の工夫(自分のグループが発表する際は発表者以外の者は聞き方の工夫)を各自ワークシートにまとめ、各グループで共有する。</li> <li>全グループの発表終了後、他グループの発表内容・話し方や聞き方の工夫、発表内容に関する質問をグループごとに学級全体へ向け発表する。</li> </ul> <hr/> 【評価規準】(関心・意欲・態度) 【評価方法】「記述の分析」

徳田麦教諭(鹿児島県立種子島中央高等学校)の実践を基に作成

### 3 本実践における指導事項

本実践において育成を目指した能力は、「A話すこと・聞くこと」の指導事項の「目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること」である。この指導事項は、「国語総合」の「A話すこと・聞くこと」及び「B書くこと」の指導事項を発展させたものであり、高校を卒業し、進学・就職を目指す3年生にとって確実に身に付けさせたい能力である。

### 4 言語活動と「判断基準」の設定

指導事項定着のための言語活動としては、言語活動例のエ「文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表する。」と設定した。

第一次においては、教科書教材「行動としての話し言葉」（竹内敏晴）の読解と要約を行った。本教材は、現代の日本社会における話し言葉の置かれた現状とコミュニケーション本来の在り方について論理的に述べられており、生徒が本文の内容と構成について理解を深めることは、自分の興味・関心のあることの効果的な伝え方を知る上で適した教材である。

第二次においては、3～4人でグループを作り、各自が伝えたいことを話し合い、グループとして全体に伝えたい話題を決定して、発表原稿と資料作りを行った。作成の際は、発表内容について調べる生徒、話し方・聞き方について調べる生徒に役割分

担を行った。いずれのグループも、自分たちが伝えたい身近なテーマを設定して、構成に留意しながら、効果的な具体例を交えて原稿を作成していた。次に紹介するのは、「占い」について調べて発表したグループの発表原稿である。

皆さんは占いを信じていますか。皆さんにとって一番身近な占いといえば、雑誌の占いコーナーや朝のニュースの星座占いだと思います。占いを信じている人はもちろん、信じていない人でもラッキーアイテムに頼ることはありませんか。 <b>〈身近な例に基づく話題提示〉</b>
どうして私たちは占いを信じるのでしょうか。占いは紀元前から行われていたようで、明日を知るためのツールとされていたそうです。中国の秦の時代では、多くの書物が焼かれた中、医学、農業、歴史そして占いの本だけは対象になりませんでした。日本でも旅に行ってはいけない方角や、貴族の服も占いで決めていたそうです。 <b>〈調べたことの紹介〉</b>
こうしてみると、占いは古くから頼りにされ、親しまれていました。しかし現代では占いの立場が変わりつつあります。もし占いでTシャツを着ると良いと出て、会社や学校にTシャツで行きますか。行きませんよね。現代では一般ルールに従うのが普通になっています。つまり占いはプライベートなものになりつつあり、公私で区別する必要があるのです。もし、国の政治が占いで決まっていたらどう思いますか。昔ならありえましたが、現代では社会が成り立たないのです。 <b>〈身近な例に引き付けた分析・考察①〉</b>
そもそも、占って一体何なのでしょう。占いは運勢を占うものであり、運勢とは偶然の積み重ねに意味を見出したものと言われています。例えば受験日に風邪をひいたとしましょう。皆さんどう思いますか。たぶん、「運が悪かった」、「なんでこんな日に」と思うことでしょうか。しかし、占いは正反対の、偶然その日にかかっただけなのです。こうした偶然が重なると、私たちは運勢が悪いと感じます。こんな時、偶然が重なっただけと言われた方が納得します。 <b>〈身近な例に引き付けた分析・考察②〉</b>
このように、占いは私たちの実感に寄り添うものでもあります。運が悪かったと思うことで次に切り替えやすくなることもあります。こうして、占いが人生をより豊かにすることもあるのです。 <b>〈具体例の一般化〉</b>
占いを信じている人もいない人も、占いに対する考えを改めてみてはどうでしょうか。新たな自分を発見できるかもしれません。 <b>〈自分の考えの表明〉</b>

こうした言語活動で表現された結果を適切に見取るためには、教師があらかじめ生徒の表現例を想定しておくことが大切である。そのためには、当センターが提唱する「判断基準」の考えが参考になると考える（詳細は、当センター『研究紀要』第119号を参照）。

単元の終末に当たる第三次においては、学級全体で発表会を行い、グループごとに自分たちがまとめた話題を発表した。発表後は、気付いたことや感じたこと、自分たちのグループの発表を聞く他のグループの様子から気付いたことを記入させ、発表の改善点や聞き方の工夫をまとめた。また、他のグループの発表を聞く際には、発表内容や話し方の工夫について記入し、発表会終了後に意見交換を行った。次は、発表会時における生徒のメモの抜粋である。

〈話をして気付いたこと〉  
 ・ しっかり聞いていた。笑顔でうなずいて聞いてくれたので、楽しかった。  
 ・ こちらを向きながら、メモを取り、リアクションを取りながら聞いていた。  
 〈他グループの聞き方の工夫〉  
 ・ 話す人に体を向けて聞いていた。  
 ・ メモを取ったり、相づちを打ったりしながら笑顔で聞いていた。  
 〈他グループの発表内容や伝え方の工夫について〉  
 ・ はっきりした具体例を挙げていて、理解しやすかった。  
 ・ 絵や小道具を用いて説明することで、内容がよく伝わってきた。  
 〈他グループの話し方について〉  
 ・ 間の取り方や声の大きさなど、聞く人を意識した話し方がされていた。  
 ・ 場所を移動したり、問い掛けたりするなど、聞く人を飽きさせない工夫をしていた。

## 5 自己評価活動と単元における評価の工夫

単元のまとめでは、生徒に振り返りシートを記入させ、自己評価活動を行った。記入に当たっては、単元の評価規準を基に、①「クラスメートと伝え合うべき自分の考えを見つめることができたか。」、②「自分の考えを効果的に表現する方法を知ることができたか。」、③「今回の学習を通して学んだことを、今後実生活に生かそうと思うか。」という自己評価の視点を示し、単元全体の学習を通して自分が思ったことや感じたことを記述させた。この視点を踏まえて生徒の書いた感想文の例を次に示す。

今回、グループで発表原稿を作成して発表するという授業を通して、これからの人生を前向きに生きる上で役立つ人間の心理について、歴史的・科学的な視点も踏まえて考えることができた。他の班の発表にも、今後役に立つことが多かった(①③)。

発表する時には、今自分が思っていることを相手に伝えることの難しさがよく分かった。ただ単に、言葉を並べて話すだけでなく、声の抑揚や声色、ジェスチャーはもちろん、話す時の姿勢までが大事なことだと思った(②)。笑顔を心掛けて、聞き手が話に聞き入るような話し方をしていきたい(③)。

また、聞いている側も、ただ聞くだけでなく、相づちを打ったり、笑ったり、メモを取ったり、姿勢を正して聞いたりすることで、話し手に誠意が伝わると思った(②)。他の人の発表を聞くと、自分たちがしなかった工夫などが多くとても勉強になった。

(①～③は、自己評価の視点を示す。)

生徒の感想文を読むと、テーマ設定の段階からグループ活動が効果的に行われたことで、成果が上がったことが分かる。また、「話すこと・聞くこと」の指導においては、どのように評価をするかが難しい点であるが、本実践例のように、「判断基準」を基に生徒の表現を教師が適切に評価するとともに、生徒に自己評価の視点を具体的に示すことで、自己評価活動の活性化を図ることができると考える。

平成27年8月26日に報告された教育課程企画特別部会の論点整理では、高等学校国語科の指導の現状と課題について、教材の読み取りが中心になりがちで、国語による主体的な表現等が重視されていないことや、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の学習が十分に行われていないという指摘がなされた。生徒たちがこれからの社会を生き抜く上でますます重要となる、自分の考えをまとめて相手に分かりやすく伝えるなどの、コミュニケーション能力の育成に向けた取組が求められる。

－引用・参考文献－

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説国語編』平成22年6月、教育出版  
(教科教育研修課)